

## 追 想 そ し て 未 来 へ

### ～開業医として変わらねばならないことと変わってはいけないこと～

岡本宏之<sup>†</sup> (岡本動物病院院長・鳥根県獣医師会)

#### 1 序

私が開業したのはバブル崩壊直前の1991年だった。大学を出た後、代診生活たった2年で開業という、今では到底考えられない無謀なスタートだった。当時は知識・技術・経験のなさも然ることながら、大した医療機械もなく幼稚な病院であり獣医師であったが、それでも私の開業医生活はスタートした。

しかしそんな状態がいつまでも許されるわけでもなく、わからないことだらけの毎日を何となく過ごしている自分が嫌で、時間を作ってはセミナー・勉強会そして学会へ出かけて知識や技術の習得に必死になっていた。

#### 2 修

最初に興味を持ったのは血液学だった。開業して以来、検査機械を次々とローンを組んで購入し一時は顧問税理士から「買いすぎ」と注意される始末であった。ただ、機械を導入したのはいいが、得られたデータを「読む」ことができずに大きな間違いを起こすことも多々あった。我ながらそのことが不甲斐なく、そして動物や飼い主に対して申し訳なく思うことが重なり、得られたデータを「読む」方法を修得することが喫緊の課題となった。最初に出かけたセミナーでは、講師の話していることがチンプンカンプンで全く理解できなかった。それが無性に悔しくて帰宅後ハンドアウトを何度も何度も読み返し、講師の話を思い出しながらノートにまとめていく作業を繰り返した。

次に興味を持ったのは心臓病だった。ちょうど小型犬の飼育頭数が増えた頃で、セミナーの際、講師から将来これらの犬が年をとる頃には心臓病（僧帽弁閉鎖不全症）の診断・治療の症例が増えるだろうと聞いたのがきっかけだった。今では開催されてないが、当時は心臓病に特化したセミナーが行われており、早速参加して、心臓病の「イロハ」を学んだ。

その中で特に集中して取り組んだのが聴診法と超音波検査法だった。聴診について学生時代に教わった記憶もなく、当時は「カッコだけ」というのが実情だったから

これは非常に役に立った、というより「助かった」という感じであった。これまで「収縮期雑音」という言葉は知っていてもそれがどのような音なのか、私は人が聞いている音を一緒に聞くという機会もなかったため、いつまで経っても聴診の技術は身につかなかった。しかしこのセミナーのおかげで私の聴診は「カッコだけ」だったものから中身が伴うものとなった。

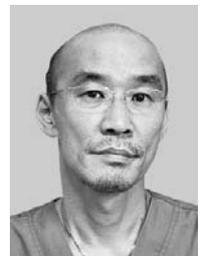
超音波検査は元々興味のある分野だったが、当時は超音波検査の黎明期であったと思う。このセミナーで心臓の描出の仕方の基本を学んだが、何よりも実習させてもらったことが私を変えた。今でも思うが超音波検査法は講義をいくら聞いても身につくことはない。これは技術であり手術と同じことだと思う。実際にプローブを持って犬の身体に当てることで自分の体がその方法を覚えてくれるのだと思う。セミナーから帰ってからは自分の病院で暇を見つけては自主トレを行ったが、なぜか楽しく感じていたのを思い出す。超音波検査については個人的に好きだったこともあって次々と機械を買い換えて今の機械で6代目になる。

これ以外には、興味というより必要に迫られて、と言った方が正しいのだが、まず整形外科手術方法についての理解を深めることであった。考えてみれば当たり前のことなのだが、正しい教育を受けていないのだから上手く手術ができるわけがない。当時は、教科書やビデオを見て「見よう見まね」で手術を行い、運が良ければ骨が

#### 岡 本 宏 之

##### 一 略 歴 一

1989年 酪農学園大学酪農学部獣  
医科 卒業  
1991年 南湖南動物医療センター  
岡本動物病院 開業 (鳥  
根県松江市)



<sup>†</sup> 連絡責任者：岡本宏之（岡本動物病院）

つく、などと博打のような状態であったのが実情である。そのためあるセミナーに参加したのだが、これまた講師の言っていることどころかスライドや手術ビデオを見ても何のことだかさっぱりわからなかった。それはそうだろう。ほぼ初心者に等しい者が専門家の優れた手術手技を見てもわかるわけがない。それでも同じ講師のセミナーには必ず参加してその技術を盗もうと必死だった。何度も参加するうちに何となく基本が身についたような気がして、次第にある程度自信を持って手術に取り組めるようになっていった。

その後、一般的な手術に関しても大きな問題が起こるようになっていた。それが「縫合糸肉芽腫」だった。自分の行った手術でも同様の経験があったから最初にその噂を聞いた時に感じたのは「恐怖」だった。それまでは何の疑いも持たず絹糸を使って手術をしていたが、それが「いけない」時代が来るとは夢にも思わなかった。当時はいろんな情報が錯綜しており、「絹糸以外なら大丈夫だ」、「吸収糸なら問題ない」などといわれていたがそれらは何の確認もないことであり、一時は本当に手術恐怖症になりかけていた。しかしその解決策として血管シーリングシステムを知ることとなりその後超音波メスの導入に踏み切った。

### 3 顧

これまでの20年余のことを思い返してみると、壁に当たって困っている時には、それを解決に導いてくれる誘いがあったように思う。単なる偶然かもしれないが、ポジティブに考えてみると「迷える子羊」を見かけた神

様が行くべき道を示してくれたのかもしれない。もっとも現実には子羊などという可愛い存在であろうはずもないのだが。冗談はさておき、何かを求めている時は自分のアンテナが敏感になっていて、数多の情報の中から自分にとって有用な情報を見つけ出していると考えたらどうだろう。今考えてみると私は常に情報に飢えていてアンテナを巡らしていたと思う。だからこそ良い方向、自分の理想とする方向へ歩んでこられたのではないかと思う。

この20年の間に我々の業界は様々なことが変化したと思う。動物の飼育場所は屋外から室内へ変化し、飼い主の動物に対する対応も「愛玩動物」から「伴侶動物」へと変化した。それに伴い飼い主の我々獣医師に対するニーズも変化しており、ますますその要求レベルが高くなっていると思われる。我々獣医師はそのニーズにできるだけ応えていかなければならないと思う。私自身、決して現状に満足しているわけではないし、これで良いと思っているわけでもない。まだまだ前を向いていかねばならない。

### 4 夢

最後に、私には獣医師を目指した時に掲げた目標がある。それは、20代で開業して自分の畑の場所を定めて、30代ではその地を耕して肥料を撒いて土を作り、そしてそこに種を撒き萌芽させる。そして40代では茎を伸ばし幹となり沢山の枝をつけ50代で大輪の花を咲かせることだ。もうすぐその花を咲かせる年齢になるのだが、果たしてその時にどのような花が咲くのだろうか。